

# ブラジルの錫地帯の点描

小村 幸二郎 (鉱床部)  
Kohjiroh KOMURA

夕食後のコーヒーの香りが漂う和やかな機内の様相は突然 ドカーンという轟音と共に巨大な機体が前後左右に激しく揺れはじめて 一変した。 火がついたように泣きわめく子供達 大人達は血相を変えてがなりたてた。 すぐ近くの座席に居た坊やが通路に投出され 笑をもらして歩いていたスチュワーデスは 空席にすがりついて足をつっぱっている。 アンデス上空の暗闇の中での突然の出来事に 一瞬 不吉な感情が走った。 「アンデスに死す」 中々ロマンティックな言葉だが まだまだこの世にたっぷりと未練もっている身をそうたやすく殺されてはたまらない。 多勢の人を不安にかりたてた激しい揺れは 10分ばかり後に ぴたりと止った。 その直後の「落雷のために大変ご迷惑をかけました……まったく心配いりません」のアナウンスに 乗客は安心したらしい。 それにしても 人の顔と表情が 突然 不安におそわれた時とそれから解放された時とで これほど変るとは想像もしなかった。 夜もとっぷりと暮れたサンパウロ郊外のコンゴニェアス空港には 篠突く雨が降っていた。

## サンパウロで

人口およそ 600 万人のサンパウロでは 15万人ほどの日系人のために 邦字新聞が発行されている。 客の姿もまったく見られない早朝 ホテルのロビーで手にした邦字新聞に 背筋がぞくぞくとするような 恐ろしい記事があった。 その記事には大よそ「大雨が降った昨日の夕刻 野良婦りの夫婦がサンパウロ郊外の川岸で農機具を洗っている時 突然 近くに居た幼児の悲鳴が聞こえた。 夫婦が子供の方を振向いた時には既に遅く その子供は 巨大な蛇にくわえられ 濁流に引曳りこまれて姿を消し 母親はその場で発狂した」と 書かれていた。 母親や父親ではなくても とても見るに耐えない恐ろしいことだが 美酒と絃歌で夜を迎える大都會のすぐ近くでこのようないまわしい事件が起こったことは まぎれもない事実である。 しかし このようないまわしい事件は 野生の世界だけに発生するとは限らない。 蛇蝎を嫌う人間の社会にも 蛇蝎以上に執念深くつきまとい そして 陽の当る所でさえ悪に生甲斐をもつ輩が

居りながら それをどうすることもできない悩みがある。

日本の22.5倍にも及ぶ国土面積をもつブラジルには 秘められているものが余にも多い。 ゆるやかにうねる内陸部を蛇行する無数の巨大な川とその水を集めて大西洋へ注ぐアマゾン川 体長10m以上になるという水棲の大蛇スクリー 人間の体内に入って生きつづける小魚カンジュロー 愛嬌のあるジュゴンや鱈 光を通さぬジャングルには毒蛇が息をひそめ 人体に卵を生みつける昆虫が飛び交うというのに そこを生活の場として生涯を終える人達がいる。 「暗黒大陸」と呼ばれた古い時代のアフリカほどではないにしても このブラジルの大地には 想像も及ばぬほどすさまじい生きざまが 絶え間なく繰広げられていそうである。 「奥地旅行では水と食べ物に気をつけて下さい。 水の中には熱病を媒介するバクテリアがいることがあるし ブラジリアで罐詰を買ってゆく方が良いでしょう」と 親切に教えてくれた若者の忠告が脳裏を離れない。 ブラジル国土のおおよそ半分を占めるアマゾン地帯は 「緑の魔境」と呼ばれて恐れられていたそうだが 人によっては 一種の桃源境かもしれない。 まるで兵隊蟻のように連なって働く砂金掘りの男達 その金を買い集めに目まぐるしく動き廻る男 エンジンのすさまじい響きにふるえるアマゾンの大地は 長い間閉ざしていたそのバールを 刻一刻刻削ぎつつある。

延長およそ 6,300 km 流域面積 705 万 km<sup>2</sup> に及ぶアマゾン川は かつて リオ・デ・ジャネイロやサンパウロなどの大都會が位置する東部とは 深い緑の原野で隔絶されていた。 しかし 1960年4月 リオ・デ・ジャネイロからおよそ 1,000 km 奥地の茫漠とした大草原に新首都ブラジリアが誕生して以来 アマゾン川はより身近な存在となった。 東京のおよそ6倍の面積をもつブラジリアの建設は今もなお続いているが 将来 これが完成し そして 既に完成している リオ・デ・ジャネイロおよびサンパウロからブラジリアまでの道路がさらにアマゾン川に到達した時を境に ブラジルの経済開発は一段と飛躍することだろう。

商業都市サンパウロは活気に満ちている。 その一隅



写真1 サンパウロ市街

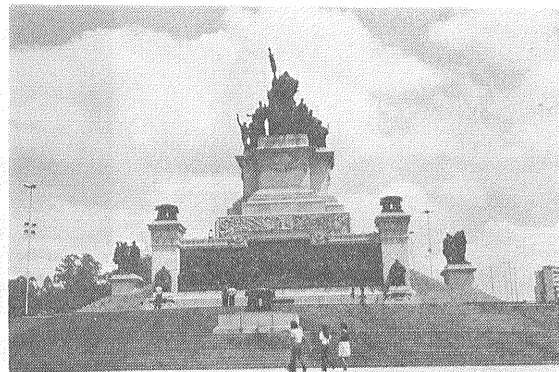


写真2 サンパウロにある独立記念塔 ドン・ペドロ通りの突当りにある。地下には ブラジル帝国初代皇帝ドン・ペドロの遺体が安置されている。

にあるガルボン・ブエノには 朱塗りの大鳥居が道路をまたぎ すずらん燈あり 日本式庭園あり そして すし屋をはじめ日本食堂が軒を連ね 日本名のホテルさえあり 地球の裏側に居る気はまったくしない。外国の日本人街としてはかなり大きいこの家並みの所々に かなり古めかしいものが残っているのは 第1回の日本からの移民が寄り集ってここで生活をはじめた名残りだろうか。鰻料理で知られている食堂に入ってみた。決して上等の食堂ではないが 特上の大きな蒲焼1匹分と野菜の煮物・白飯・味噌汁・おしんこ・果物の昼食の値段はおよそ1,200円であった。日本でこの蒲焼を注文したら 恐らく 3,000円以上はとられそうである。

ドン・ペドロ通りの突当りの小高い丘の上に建つ独立記念塔の地下に ブラジル帝国初代皇帝ドン・ペドロの遺体が安置されている。ナポレオンの軍勢の前に祖国ポルトガルから植民地ブラジルへ 父と共に脱れたペドロは その後 父の帰国後もブラジルにとどまり この丘の上で “独立か死か” と叫んで ブラジルの独立を決意したという。時は流れ “21世紀の国” として世の注目を浴びるブラジルを 自国の植民地を独立させそして皇帝の座についたドン・ペドロはどのような思いで見守っているのだろうか。

夜の一時 テレビは 多勢の日系人を前に熱演する2人の日本人歌手を映し出している。最近 日本のテレビではほとんど見かけない歌手だが やはり 日本の歌は 既にブラジル人になりきっているにちがいない日系の人々の心に受け容れられる何かを強くもっているであろう。望郷の念をかきたてられれば一層切なくなることもあろうに 満場の客のアンコールの声は いつまでも止まなかった。

### 奥地旅行の一こま

現地へ向う朝 7時半にホテルを後にした。今朝は車で10分ほどのコンゴニマス空港へ行けばよいので サンパウロへ到着した時よりは楽である。リオ・デ・ジャネイロ行きの飛行機だけでも10分か15分間隔で離陸するので この空港の混雑ぶりはかなりのものだ。

サンパウロからブラジルアまで 865 km およそ1時間5分で飛ぶジェット機には 空席は一つもなかった。隣席の紳士は 飛び発つとすぐ アタッシュ・ケースから取出した書類に目を通しはじめた。首都がブラジルアへ移ってからは役所関係の建物もすべてブラジルアへ移転しているので どうしても飛行機を利用しなければ用が足せないのだろう。きわめてわずらわしいにちがいないが これも 将来の輝やかな国造りの一つの過渡の現象かもしれない。わずか1時間ばかりの空の旅だが 機内では早速 ワインにはじまるボリュームたっぷりの朝食が配られた。ステーキはやわらかく 平均的日本人の夕食以上に盛りだくさんの朝食を提供してもらえるのは大変な難い。日本ではとても望めないことだが 同じ国内線で 何故このようにサービスに著しい差異があるのだろうか。ジュースかスープ1杯にクラッカー2~3枚のサービスしかない日本にくらべてブラジルの方が経済的にゆとりがあるとどうしても思えない。ゆるやかにうねる大草原に ぽつんぽつんと小さな部落が点在している。大して広くもない農耕地をもつこのような部落での生活は 肉体的にはもちろん精神的に相当の忍耐が欠かせないだろう。子供達も居るはずだが 学校教育はどのようにして行われているのだろうか。快晴の空の青さが痛いほど目にしみる空の旅は 突然 どす黒い雲の中の旅に変わった。機首は既に



写真3 ブラジリア北方のパラナ川の支流

下っている。

海拔およそ800mの首都ブラジリアの上空は どんよりと曇っていた。6人乗のチャーター機に乗り換えて出発するまで 到着後わずか30分の慌しさである。白とブルーの優美な姿態をもつこの小型機は ブラジルの国産機である。以前にセスナを操縦したことがあるせいか 乗込んですぐ 操縦席の計器類や操縦桿やスロットル・レバーなどに目が向いた。

150mばかり滑走して 機体はふわりと浮上り 大きく旋回して間もなく 水平飛行に移った。しかし どうやら 目的の方角とは全く違う方へ飛んでいるらしい。出発してから20分ばかりの後 方角違いが判った。その原因は 北方約340kmのフォルモソと全く同じ地名が東方にもあったことである。ブラジリア上空まで往復

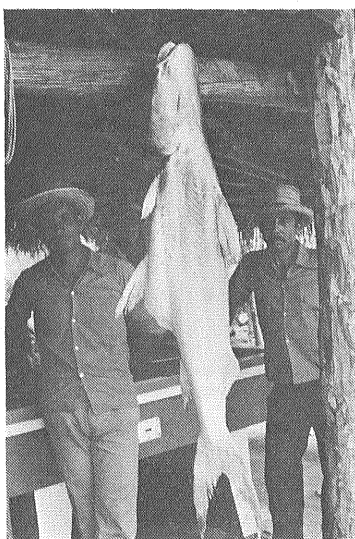


写真4

パラナ川支流の魚  
体長1.7mのこの魚はパラウーナと呼ばれる淡水魚の子供。白身の魚でフライや煮付にすると美味しい。土産として5,000円で買った。

40分のロス燃料タンクの小さい小型機にとってはかなりの痛手のはずだが 操縦士は 大して気にしていないらしく 厚い雲の中を西へ機首を向けた。

南米の人達の明るく大らかな気質は こうした場合 同行者の気持を和らげるのか 視界ゼロのどす黒い雲の中で揺られっぱなしの40分間は楽しいあろうはずもないのに 不満顔の同乗者は1人も居なかった。ブラジリアの上空を過ぎてから1時間 ゴヤス州の寒村フォルモソの滑走路に安着した。

人口およそ5,000人のフォルモソは 緑一色の大平原の中にある。空から見ると中々美しいが 結構むし暑く ラテライトの道は埃っぽい。村には不似合いなほど広い表通りには家が軒を連ねているが この村唯一のホテルも銀行も 表通りからはかなり奥まった場所にあ



写真5 チャータ機とフォルモソの滑走路 かなりでこぼこで小砂利の多い滑走路 雨季になると表面が一層荒れるらしい。

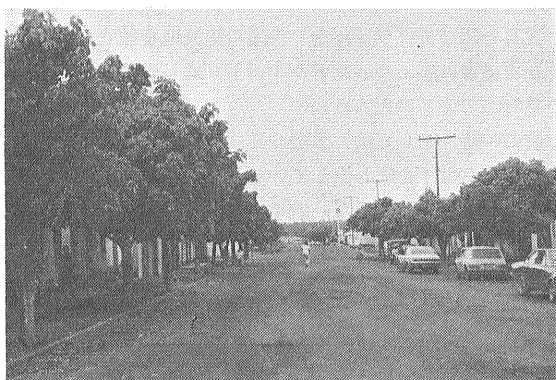


写真6 フォルモソ風景 ラテライトの道と並木の緑は美しく 見えるが埃っぽく 白いシャツも赤く染まりやすい。

る。客室数20のホテルは閑散としていた。案内された部屋は薄暗く壁際の鉄製ベッドは所々錆びシーツも枕カバーも妙にしめっぽい。窓ガラスの破れをふさぐ雑誌のなまめかしいグラビア写真が剥がれた隙間からは様々の虫が威張りくさって出入りしている。天井からぶら下がっている裸電球はいつ掃除されたのか見当もつかないほど汚く部屋の片隅にある暗いトイレの床は水でびしょびしょに濡れている。少々なことでは驚かないほど人生経験を重ねているはずだが裸電球や窓ガラスの破れはよしとしても寝具がしめっぽいやトイレが濡れているのだけはどうしても好きになれない。しかしここより他に泊る家はなく他人様もこの部屋で泊ったことを思えば横になって眠れるだけましかもしれないとは思うものよく考えてみればこの部屋はこのホテルでは最低の部屋だったのかもしれない。部屋の番号は外国のホテルでは滅多にお目にかかれない13である。

白飯と焼肉とトウトウ（豆とマンジョーカを混ぜた食物で色も味も日本の赤飯によく似ている）の昼食はあっけなく終わった。サンパウロでいろいろとアドバイスをもらいはしたがブラジルで罐詰を買う時間はなく現地では食べさせてもらえるものを食べるしかない。ただ生水だけは絶体に飲まないことだ。フロントの男の話ではこの付近の川にはスクリーはいないし毒蛇も毒虫もないということだから生水さえ飲まなければ特に注意することもない。だが大きなスクリーは瘤牛を丸飲みにするとか聞かされると余り良い気持はしない。

昼食後直ちに現地へ向うことになった。朝早く起きたので少々睡気はあるがのんびりと寝ているひまはない。石ころだらけの道の大きなくぼみには水溜りがあり車の揺れは相当なものだ。パナナの集荷地になっているトロンパスを過ぎモンテ・ビデオから東へ曲っておよそ30分道路は完全に崩壊して自動車の使用は不可能となった。こうなると歩くしかない。赤土の道を横切るささやかな流れの底にブラック・サンドが溜っている。すくい上げてルーペで見るとそれは角がすりへって丸味をもった磁鉄鉱であった。歩きはじめておよそ40分後に幅15mばかりの川に出た。橋は濁流に押し流されてそのかけらさえも残っていない。泥水の激しい流れを目前にして途方にくれた。切角早く起きて飛行機を乗り継ぎ休む間も惜しんで自動車を走らせてきたというのに全くついていない。しかし天はそうたやすく人を見捨てはしないらしい。対岸に若い男が姿を現わし馬を貸してくれることになった。

ぼつりぼつりと降り出した雨は川を渡り終えて間もなく土砂降りとなった。川を渡る前に万一の場合を考えてパスポート・航空券・トラベラーズチェック・現金・カメラなどをビニール袋に入れておいたのは正解だった。幅2mばかりの山道を歩きはじめて5分とたたないうちに下着まですぶ濡れになった。こうなると土砂降りも一向に気にならない。吹き出す汗をぬぐう必要もなく懸命に歩き続けるうちに急速に暗くなってきた。時計の針は5時30分を指している。遂に路傍に露出する岩石を全く判別できないほど暗くなり日没後は危険だという案内者にうながされて引返すことになった。全く口惜しいことだが仕方がない。川の水は益々激しく流れていた。深い木立の中の一軒家に立寄ってはみたものの馬を借りることはできなかった。息子の話では父親が馬で下流へ亀を捕りに行ったらしい。馬がよろけるほどの激しい水の流れに押し流されないで横切れるかどうかは分らないがいつ帰ってくるか分らない主人を待つわけにもいかず貴重品を頭にのせて川へ入った。肩近くまで水に浸り川底の大きな石ころに足をとられどうしようもなく早い流れに押し流されそうになりながらも無事に渡り終えた。

ずぶ濡れの身のふるえがとまらないほど強い向い風で冷えきっていることを知らぬ気に車はとっぴりと暮れた夜道を突走った。昼間はのんびりとしていたトロンパスでは何か大事件が発生したらしいが余りの寒さにそうしたことに気を配るゆとりはなく一刻も早くホテルへ帰り着くことだけを念じている。人通りは全く絶えぼつんぼつんと灯る燈だけが人の息づかいを伝えるフォルモソは深い闇の中に静まり返り虫のすだく声さえ聞かえない。ホテル帰着7時40分早く温まりたい一心で服を着たまゝ飛び込んだシャワー室ではあったが無情にも湯は一滴も出ずばかでかいシャワーからは冷たい水がほとぼした。

ガラスの破れた窓から容赦なく飛び込んでくる大きな蜂や蛾は久しぶりの人の臭いに魅せられてかしめっぽい部屋の中を我物顔で飛び回ってはしつようにまつわりついてくる。字を読むのさえ嫌になるほど暗い裸電球のか細い光を頼りのメモを終りベッドに横たわってはみたものの嫌らしい虫共は真暗がりの中でまつわりつく。大きな虫が突然どさ一と顔にとまる度にどき一として神経がいらだつものいささか疲れていたのかいつの間にか寝入ったらしい。

午前6時意外とさわやかに目覚めた。皮膚が丈夫にできているせいか虫に刺された跡らしいものはどこにもない。牛の赤肉のステーキと目玉焼の朝食を終え



写真7 温泉 先カンブリア時代の石英片岩の割目から湧出している。40°C前後で湯量は多く 近くに保養所を造る計画がある。

て 早々に出発した。作業服は着替えたものの 靴は濡れたままである。

出発してから1時間半ばかり走って 温泉があるという谷へ下りてみた。水量豊かな幅10m余りの川の岸に露出する絹雲母石英片岩の割目から 確かに温泉が湧出していた。温度は40°C前後 湧水量は豊かである。案内人の話では、ここに保養所の建設が計画されているということだったが それが実現すれば 村の人達の格好の社交場になることだろう。このような温泉は2~3個所で見ついているらしいが 一体 このような温泉はどのような経路で湧出してくるのだろうか。楯状地でこのような温泉を見るのは3度目だが どの場合でも その湧出場所が断層帯や新規火山地帯というわけではない。地表から水が浸みこみ 地下深部で温められそして 再び地上に温泉として湧出するという図式はこのような温泉湧出について一つの考え方を示すものらしいが 上昇する間に温度は当然下るはずだが 実際にどの程度の深さで どの程度の温度まで温められるのだろうか。きわめて小さな割目から湧き出る温泉を見ていると 単純な図式では中々理解しがたい また 理解したくない何かを感じさせられる。自然の営みは壮大であると共に驚異的なほど繊細なのだろう。

車に戻って 赤土の道を 東へ向った。しかし道は激しく流れる泥水に吞れて 完全に断たれていた。水深は全く分らない。素裸になった案内人が 恐る恐る濁流に入り 頭一つ残して対岸に辿りついた。車で渡ることは不可能である。かりに大型の車がきたとしても 川の兩岸の20°近い赤土の坂道とこの深さでは 渡ることはできない。昨日に続く今日のつきのなさ ブラジル奥地の川は全く意地悪である。とにかく 大木

を切り倒し 丸木橋を作って渡ることにした。寒い地方では大木を切り倒すのは容易でないが 強烈な太陽の光と湿気に恵まれたこのような地帯では 植物の成長が早いだけに比較的軟質の木が多いので このような場合には大いに助かる。無事に渡り 対岸の急な坂道を登りつめた所で一休みしているところへ 運よくトラックが通りかかった。将に“地獄に仏”である。そのトラックは われわれを乗せて 奥地へ向って引返した。

石ころの多い赤土の曲りくねった道は 深い緑の中をどこまでものびている。全く部落のない道中に 草葺きの粗末な家が1軒 ぼつんと建っている。電燈もなければ炊らしいものも見当らない淋しい山奥に 何を好んで住んでいるのだろうか。軒先の木箱の上には 食器が並んでいる。2時間ばかり揺られて 午後1時20分 目的地に到着した。

ここはゴヤス州探鉱公社 (METAGO) の探鉱現場である。広々と切り開かれた小高い丘の上の宿舎では70名が寝起きしているそうだが 昼食時をとくに過ぎている今は ひっそりとしている。

この探鉱現場では Serra Dourada 花崗岩体中の錳鉱床を起源とする砂錫を目的に 探鉱が行われるということだが まだ伐採や道路造りの段階で 本格的な探鉱作業は着手されていない。技術者の話では この花崗岩体の南東端部に幅0.2~1mに錫石が鉱染状に含有されており その全体の幅はおよそ300mで 花崗岩体の伸長方向と平行に縞状をなして約10km連続しているということである。延長およそ60kmのこの花崗岩体のうち 何故 南部に錫が濃集するのだろうか。事務所に置いてある錫石を含む花崗岩は著しく曹長石化作用を受けており ナイジェリアの Jos 高原の錳鉱床を彷彿させる。この付近の地質図幅を見ているうちに 幾つかの興味をそそられた。

探鉱が進められている地区の東側には Sa Da Canabrava の塩基性-超塩基性複合岩体を取囲むように 巨大な衝上断層が南北方向に伸びるサツマ芋のような形の区域を作り 西側には 北東-南西方向に弓のような形に走る衝上断層が走っている。そして花崗岩体は 殆んど例外なく これらの衝上断層の方向と調和的に伸長して分布している。規模の大きな4岩体についてみると 錳鉱床は 東から西へ向って 1番目と3番目の岩体に伴われ 2番目と4番目の岩体にはみられない。このような現象は この地域の東方150km付近に分布する岩株状岩体についても認められる。一方 ベリリウムやタンタルの鉱物を伴うペグマタイトは錫を伴わ

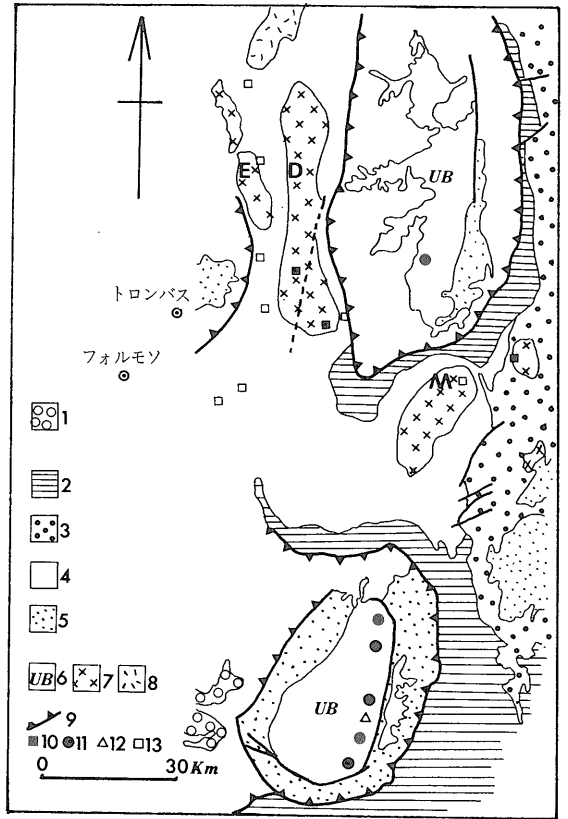
ない2番目と4番目の岩体に産し 錫を伴う3番目の岩体では北半部で見出されている。 同じ時期に進入した花崗岩体なのに このようにはっきりした相違がなぜあるのだろう。 それぞれの花崗岩体の詳細な岩質は明らかではないが 少なくとも このような相違に浸蝕度の差が係わっていることは想定される。 一般に 花崗岩体内のベリリウム賦存深度は 進入時の岩体の表面から2,000m以内と考えられており また 岩体頂部に濃集すると見做されているが 被貫入岩では 花崗岩体からどの程度離れた所まで ベリリウム鉱物を含有するペグマタイトが生成されるのだろうか。 3番目の Serra Dourada 岩体の南西方20 km 付近に位置する含緑柱石・電気石ペグマタイトからどの程度深部に花崗岩体が潜在しているのか知りたい欲望にかられはするがそれは 所詮 実現しないわがままというものだろう。

探鉱事務所からやや離れた山腹に錫鉱山がある。 探掘場は水没してよく判らないが 錫石は 黒雲母の濃集するペグマタイト質の部分の下盤側1 m前後のはんに 鉱染状に含有されているらしい。 貯鉱の品位は1.5~2% Sn<sub>2</sub>O<sub>3</sub> と推定され 微粒の錫石の他に黄銅鉱や磁鉄鉱が含有されている。 近くの小さな溝で パンニングに余念のない人達が居た。 パンニングして得たものをハンド・マグネットで選別したものがその成品であるが 余程辛抱強い人でなければこの仕事は務まりそうにない。 早朝からこの仕事に精出しているという男の傍に置かれたやや大きめの罐詰の空罐には 6分目ほどの成品が入っていた。 日没までは仕事を続けるそうだが その罐一杯の成品を得るのは難かしかろう。

人里から全く隔絶された奥地のキャンプと聞いた時には 必要最小限に伐採した所に テントか粗末な草葺きの小屋が建っているだろうと想像していたが この想像は見事にはずれた。 事務所も食堂も宿舎も 中々よく出来ていて 作業がはじまって間もないにしては 少々ぜいたくにも思えるほどである。 しかし よく考えてみれば こういうキャンプだからこそ仕事に精出することもできるのだろうし テントを想い浮べる方がむしろおかしいのかもしれない。

じっくりと腰を落着けて現場を見る時間もなく キャンプを後にした。 泥んこの道に喘ぐ車のうなり声を聞きつけたのか 一軒家から人が出てきた。 世捨人か老人の住居かと思っていたその家には どうやら 数人の娘さん達も住んでいるらしい。

午後6時 フォルモソのホテルに帰り着いた。 ぼったりと人通りの絶えた真暗な道を南へ向い 村はずれにある雑貨屋に入って 特に必要でもない煙草を買った。



第1図 フォルモソ東方の地質鉱床概略図 (10万分の1地質図幅 FOLHA GOIAS SD.22 より作成)  
 1. ラテライト 2. Bambui 層群 3. Arai 層群  
 4. Araxa 層群 5. 片麻岩・花崗岩・角閃岩等  
 6. 塩基性-超塩基性複合岩類 7. 花崗岩  
 8. 花崗岩・モンゾニ岩 9. 衝上断層  
 10. 錫鉱床 11. ニッケル鉱床 12. 白金鉱床  
 13. ベリル鉱床  
 E : Cerra do Encosta D : Cerra Dourada  
 M : Cerra da Mesa

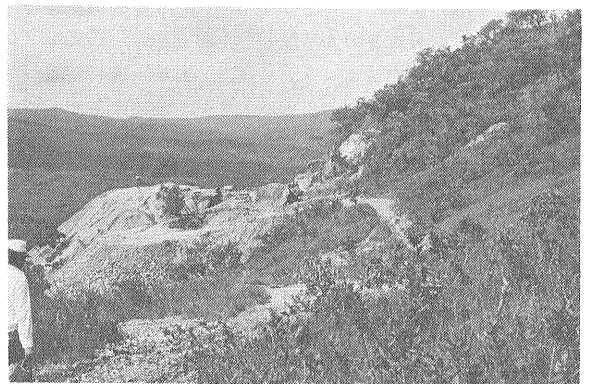


写真8 キャンプ近傍の錫鉱山 先カンブリア時代の黒うんも花崗岩中に鉱染状に含有されている錫石が 探掘の対象となっているらしいが 探掘場は水没していた。

この家をわざわざ訪ずれたのはこの家の主婦が日系人であると聞いたからだ。残念ながらその主婦は遂に姿を見せてはくれなかった。その主婦がどこから嫁入りしてきたのかは分からない。立派なブラジル人として生れそして生きているのは確かだろうがブラジルまで陸路500km余りのこの僻地でたった1人の日系人として生きてゆくには相当の忍耐が必要だろう。

星間のむし暑さがうそのように冷んやりとした深夜電燈のか細い光りを頼りにここを翌朝離れるというのに未練がましく地質図幅に見入っていた。緑柱石—雲母—緑柱石—タンタライトなど多様な鉱物組合せをもつ大規模のペグマタイトや超塩基性岩中にレンズ状をなして断続するニッケル鉱床、結晶片岩中の金や銅や鉛・亜鉛鉱床などこの地域には多種多様の鉱床が分布する。あれも見たいこれも見たいと出発前の希望は募る一方だったがその殆んどをかなえることはできなかった。旅行の目的がそうした鉱床を見ることではないことを十二分に自覚はしているものやはり欲望を押えてしまうには未練が残る。

### 新首都ブラジリアとリオ・デ・ジャネイロの今昔

肌寒い早朝再び訪れることもないフォルモソを一回りしてみた。ぴったりと閉ざされた家に人の気配はなく村はまだ眠りから覚めていないらしい。物音一つしない静かな平和そのものといったこうした村でも忌む事件が起るのだろうか。

45分遅れて到着した迎いのチャーター機は相変らず厚い雲の中をブラジリアへ引返した。14°Cのブラジリアには小雨が降っていた。サンパウロ行き飛行機に乗り換えるまで50分ばかりのゆとりがある。タクシーを拾って市内へ向かった。

茫漠たる緑の高原にこのような超近代的な都会が誕生することをどれほどの人が信じただろうか。1955年10月に就任したクピチック大統領は50年も遅れた国と見做されていたこの国の後進性を5年で解消することを目指しその基盤として工業の積極的推進を図った。様々な鉱物資源の宝庫として注目されていた“緑の魔境”はしかし人を容易に受け容れてはくれない。東部の人口密集地域とアマゾンとを結ぶ大動脈とその接点の建設は恐らく苦境に立たされることを避けられないとは判っていないながらも新政権にとっては最大の事業として成就すべき命題であったろう。18世紀初頭に発見された金やダイヤモンドを求めて多くの人々が徐々に“緑の魔境”奥深くに入っていた。そのさきがけとなったのはパンデイランテスと呼ばれる奥地探検

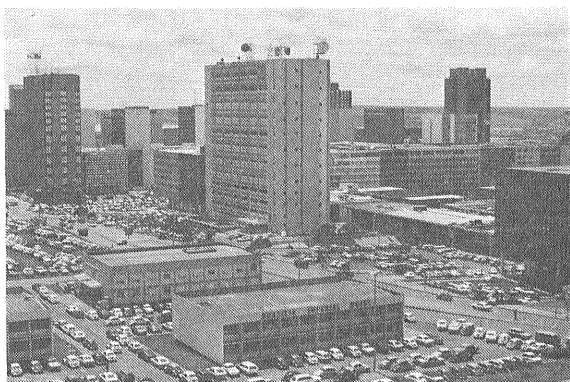


写真9 ブラジリア風景 ホテルや商店のあるブロックの風景。道路には歩道がなく自動車の多さはブラジリアでの生活には自動車を欠かせないことを暗示している。

隊であった。人跡未踏の秘境にぽつぽつと粗末な家が立ちやがてそれは集落となり鉱物資源の探査は点在するこれらの集落を拠点として広まっていた。工業の発展と新首都の建設に情熱を傾けたクピチック大統領の脳裏にはその基盤として欠かせない鉱物資源の探査・開発のために危険に満ちたアマゾンの奥地でまるで兵隊蟻のように行動する頼もしい男達の姿が去来したことだろう。ブラジリアの建設や道路の建設などは進んだものの経済的不安も急速に深まっていた。恐らく赤字財政に根ざす経済的危機に直面した時多くの人はこれらの大事業に批判的だったろう。しかし途方もなく広い国土と未開発地域をもつこの国にとっては遅かれ早かれこのような大事業は避けられるべきものではなからう。新首都ブラジリアは人口およそ70万人をようしながらまだ建設途にあるが東部とアマゾンとを結ぶ接点としては既に大きな力を発揮している。

ナスカの謎の地上絵を想わせるブラジリアはジェット機型をした都会である。若い設計家の構想にもとづいて建造されているこの都会では機首に当たる所に国会議事堂がそびえ前方座席に当たるその後方には最高裁判所や各省の建物その両側には各国の公館が建並び翼に当たる部分にはバス・ターミナルを中心に住宅群や商店が建っている。将に超近代的なこの都会の前面には乾燥しきった高原都市を潤す巨大な人造湖がある。巨大なジェット機型のたたずまいを見ていると未来に大きく羽ばたくブラジルの姿を設計家はこの首都造りに托したように思える。ブラジリアは未完成であるが建築開始からわずか4年で新首都としての機能をもつまでに建設が進んだことを知る時ブラジリアの建設に托

すこの国の願望が ひしひしと 伝わってくる。ブラジリアが完成した後 この国はどのような変貌ぶりをみせるのだろうか。道路は広く 美事な立体交差は美しい。しかし何故 どの道路にも歩道がないのだろうか。都市造りでは歩道はかなり優先すると思っていたが 超近代的都市ブラジリアを見てみると いわゆる未来都市では 自転車をかうことさえままにならない人でもこのこと歩く必要はないように思えてくる。出来ることなら 1時間か2時間に1本しかこない電車を寒いホームで辛抱強く待った上に 汚なくて臭くて満員の車内に押し込められるような通勤地獄を脱れて スーパー・カーで優雅に通勤してみたいものだ。しかし そうなると 運動不足による肥満防止にまた悩まなければならないかもしれない。

出発10分前に 空港に戻った。切符を渡し 面倒な手続きを御遠慮願って 飛行機目ざして全力で通路を走り抜けた。既に乗込んでいた旅客はほっとしたらしいブラジリアからサンパウロまでは約1時間の飛行だが、この機内でも ステーキ中心の食事がサービスされた。毎日毎日ステーキばかり食べているようだが これは自分の好みではなく 食べさせられているわけでどうしようもない。よく飽きないとは思いが 恐らく 脂のない赤肉だけを食べているからだろう。林立する高層ビルをかすめるようにして 12時15分 コンゴニア空港に到着した。だが これでやれやれと 一休みするわけにはいかない。

着換えと調査用具を預けるために都心にあるホテルを往復し 到着してから1時間半の後には リオ・デ・ジャネイロ行きの大型プロペラ機に乗り込んだ。全く息つくひまもないほどの慌だしさである。サンパウロと



写真11 リオ・デ・ジャネイロの遠景 中央の砂浜はコパカバーナ海岸 その左側はイパネマ海岸 右側の高い岩山は ポン・デ・アスカル



写真10 超近代的な寺院 国会議事堂に向って右側に建っている。地上には明かりとりを兼ねた写真の屋根だけがある。地下の寺院内部には 青色の素晴らしいステンドグラスの壁がある。手前は入口。

リオ・デ・ジャネイロとを結ぶこの飛行機は 通称ポンチ・アエレア (空のかけ橋) と呼ばれ 45分で飛ぶ。空席の目立たない機内には 日本人客は1人であった。

軽食と飲物が配られて間もなく 偶然に空いていた隣席に こげ茶色のスーツを見事に着こなした老人がやってきた。そして 何かを 早口で話しかけてきたが 当方には何を言っているのか全く判らない。仕方なく「すみません オブリガード以外のポルトガル語は分かりません」と 英語で言ってみた。するとその老人は 今度は 英語で話しはじめた。ポロシャツ姿で1人ぽつんと乗っている日本人を見て淋しさをまぎらわせてくれるつもりだったらしく それから後サントス・ドウモン空港に到着するまで その老人は リオ・デ・ジャネイロの観光地やホテルや乗物などについて 親切に教えてくれた。切配られた食事に手をつけられなかったのは少々心残りではあるが この老人が教えてくれた諸々のことは はじめてリオ・デ・ジャネイロを訪れる者にとっては 得難い。わずか50分ばかりの旅行中に逢った親切な老人は 名前と住所を聞いても教えてくれず「ブラジル人ですよ」と 一言残して別れて行った。

ナポリや香港と並ぶ天然の美港をもつ リオ・デ・ジャネイロは 実に美しい。 “南米のニース” と呼ばれるコパカバーナ海岸に続くイパネマやレブロンなどの白砂の浜 高層の豪華なホテル グアナバラ湾に突出した円錐形の岩山ポン・デ・アスカル 背後の山コルコバードに立つ高さ50mのキリスト像 立体的なこの大会場の美しさは素晴らしい。国際的観光都市として有名かつての首都リオ・デ・ジャネイロは その華やかさと明るいサンバのリズムの陰に 外国の首都であったという珍





写真12 コパカバーナ海岸 真夏には人で埋まるこの砂浜も真冬の今は閑散としてはいるが「南米のニース」と呼ばれるだけあって 流行の水着をつけた遊客は多い。

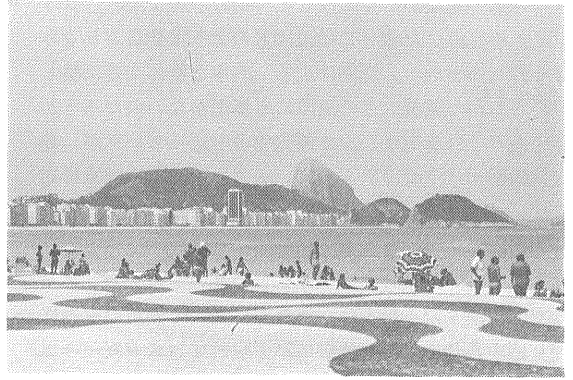


写真13 コパカバーナ海岸の風景 波を形どったような歩道の模様 真白の砂浜と建並ぶホテル ポン・デ・アスカルの岩山などが作り出す美しい風景。

しい過去をもっている。

1807年 ナポレオン軍の部将ジュノーに占領されたポルトガルの摂政ドン・ジョアン6世は イギリス海軍の援助を得て 急速に発展しつつあった植民地ブラジルへ脱れ1808年1月22日 リオ・デ・ジャネイロに上陸してここをポルトガルの首都と定めた。次第に視界から消えてゆく祖国とまだ見ぬブラジルにどのような想いを胸に秘めて この権力者と従者達は 波荒い大西洋に船出したのだろうか。屈辱と不安とに乱るゝ彼等の胸中には 再び祖国の土を踏む淡い希望と二度と帰れまい絶望とが渦巻いていたことだろう。しかし 世の中の移り変りは神だけが知るのか この屈辱の船出がブラジル独立の引金になるうとは 誰もが夢にも想わなかったにちがいない。

イギリスに対する永続的な経済従属を決定づけた1703年のメスエン条約を基に ポルトガルはナポレオン軍の

進攻に際して 対英従属を一層強めていった。しかし国土がナポレオン軍とイギリス軍との戦場と化したのを契機として 反英思想が芽生え やがてそれは ナポレオンの没落という事態を迎えて 革命を生み 更には革命を達成した立憲派の植民政策をいち早く察知したブラジルの独立運動を誘発する要因となった。

革命を実現した立憲派の要請によって ジョアン6世は 1821年 王子ペドロを残してリスボンへ帰った。そして翌年 ペドロはブラジルの独立を宣言し およそ320年にわたるブラジルの植民地時代は 終りをつげた。しかし ブラジル領のシスプラチーナが独立してウルグアイ共和国となったことから推察される通り ペドロ

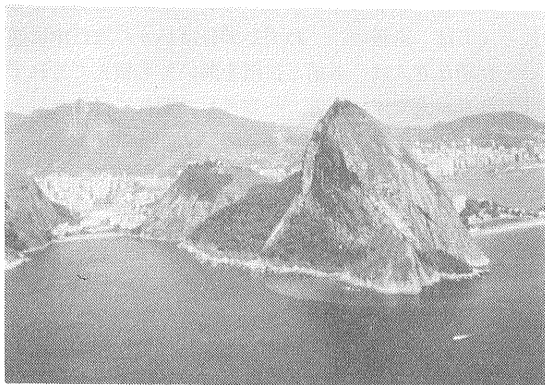


写真14 グアナバラ湾とポン・デ・アスカル ポン・デ・アスカルとリオ・デ・ジャネイロ市街。後方左手の岩山がキリスト像のあるコルコバード。

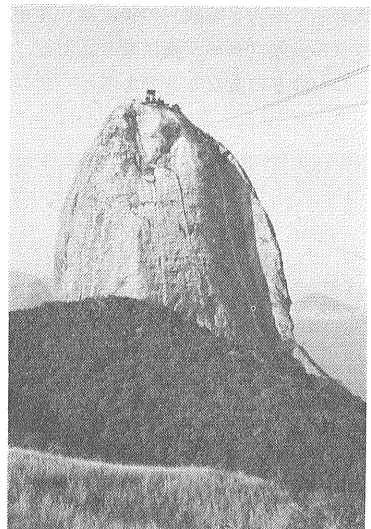


写真15 ポン・デ・アスカル ポン・デ・アスカルの頂上へは ゴンドラで行くことができる。この頂上からの眺めは絶景である。

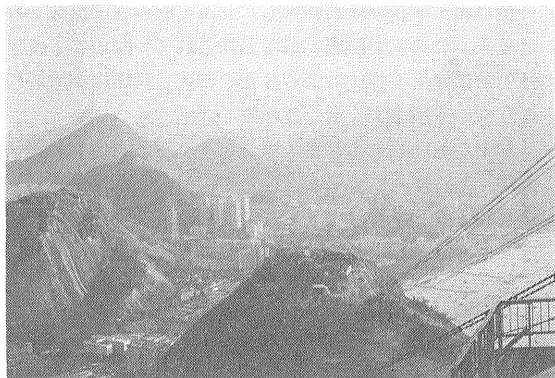


写真16 ポン・デ・アスカル頂上からのリオ・デ・ジャネイロ風景 後方右手の鋭い岩山はコルコバード。

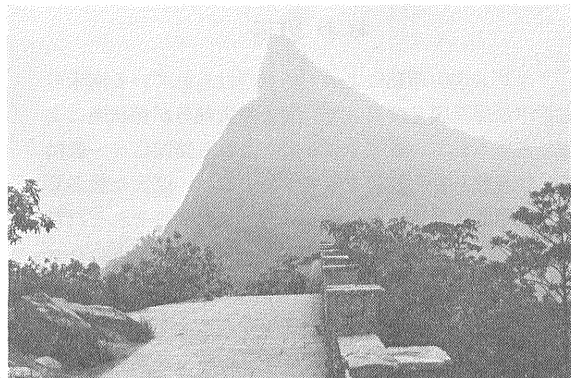


写真17 コルコバードのキリスト像 高さ50mのコンクリート造りのこのキリスト像は ポルトガルを向いているということだがどうだろうか 頂上近くまで自動車道路がある。

皇帝の政治の手腕を疑問視する者も少なくなく 即位して9年後の1931年 ペドロ皇帝は 民衆の不満の声を背に退位し 淋しくリスボンへの旅路についた。その後のブラジル帝国は パラグアイ戦争で多くの犠牲者を出しながら得るものもなく 皇帝不在中の女王イザベルによるおよそ72万人のドレイの解放 経済危機など 安定した日を送ることもなく 遂に 1889年11月15日に発生

した革命によって 滅亡した。その後ブラジルは 政治・外交面での紆余曲折を経て 独立国として成長を続け 今や“21世紀の国”として熱い視線を浴びている。その基盤となっているのは広大な国土と豊かな鉱物資源である。



第2図  
ブラジルの鉱床分布図 (銅, 硫化鉄, 鉛, 亜鉛, すず, モリブデン, タングステン)  
(MAPA METALOGÉNÉTICO DO BRASIL より作成)

### おわりに

アルプス造山運動によって特徴づけられている南米の太平洋沿岸諸国とは異って 国土の大部分が楯状地によって占められているブラジルは これら諸国には一般に乏しい多様な鉱物資源を保有している。 巨大な数多くの鉄鉱床や生産量・埋蔵鉱量において世界のそれぞれ71%と79%を占めるニオブをはじめ ポーキサイト クロム マンガン ニッケル すず レア・アース 各種の宝石や貴石などはその代表的なものであるが 鉱床型や規模こそ違え 銅 鉛 亜鉛などの鉱床も多数発見されている。 これらの生成関係については不明な点が少なくないが その圧倒的多数は始生代後期から古生代前期の間に生成され 時代によって 鉱化作用の性状はかなり異なっていると考えられている。 西部のロンドニアからアマゾンにわたって分布する すず鉱床が最古期花崗閃緑岩に伴われ 主な銅 ニッケル マンガン カーボナタイトなどの鉱床が13~18億年の岩層中に 鉄 クロム 鉛などの鉱床が9~13億年の岩層中に そして5.7~6.2億年の Bambui 層群中にミシシッピー・パレ

一型の鉛・亜鉛鉱床が胚胎し シルル紀以後に生成したと見做される主要鉱床が殆んど知られていないことなどは 鉱化作用の時代による性状の相違と鉱床密集地域の偏在性の原因をよく示している。

鉱床の地理的分布を見た場合 その圧倒的多数が高原地帯 とくに人口密度の高い北東部から南端部にわたる地帯に分布していることに気がつく。 このような分布は 上に述べたような鉱床の生成時代・性状などを反映していることは当然であるが さらに 鉱床発見の機会が地形条件や人の動向と深く係わりあっていることを暗示しているのではなからうか。 アマゾンの低地帯で発見されている鉱床の多くは 谷沿いで発見されているがこの低地帯を占める第三紀以後の堆積物におおわれた先カンブリア系には一体どのような鉱床が潜在しているのだろう。 これと同様の条件にある広大な地域は他にもある。 豊かな鉱物資源は 今後の探査によって 益々豊かになってゆくことだろう。 果てしもなく続く大平原を目の当りにして 想像も及ばぬ浸蝕・削剝作用の移り変りを想い 漂砂鉱床に挑む人々の姿に想いを馳せながら短かなブラジルの旅は終わった。



第3図  
ブラジルの鉱床分布図(クロム, ニオブ・タンタル, ウラン)  
(MAPA METALOGENTICO DO BRASIL より作成)

- 銅・硫化鉄
- 鉛・亜鉛
- △ すず
- ▽ モリブデン
- ◇ タングステン